

19 全国の障害者支援施設等を利用している視覚障害者の眼疾患や視機能について

中西 勉¹⁾ 清水朋美²⁾ 林 知茂²⁾ 遠藤律子¹⁾

1) 病院リハビリテーション部ロービジョン訓練 2) 病院第2診療部

1. はじめに

国立障害者リハビリテーションセンター病院リハビリテーション部ロービジョン訓練では、昭和 61(1986)年から5年ごとに視覚障害者が利用している施設等に対して視覚障害原因等についての調査を行っている。ここでは、7回目の調査の概要を報告する。施設等利用者の視機能等の実態を知ることは、視覚障害のある利用者に対する医療やリハビリテーションに資するものと考えられる。

2. 調査対象と調査期間

視覚障害者が訓練や生活などを行っている盲養護・特別養護老人ホーム等を含む施設などを対象とした。期間は、平成 28 年 12 月から平成 29 年 2 月であった。

3. 調査内容

調査内容は、利用者の調査時の年齢、視覚障害の原因となった眼疾患、矯正視力、身体障害者手帳の等級、重複障害の有無と内容などであった。

4. 方法

全国の視覚障害者を利用対象とする 215 施設等の施設長に調査を依頼した。得られたデータから、主な眼疾患、視力の程度、調査時の年齢、重複障害の内容等を調べた。

5. 結果

71 施設・部門(機能訓練：12、職業訓練・就労移行：8、障害者支援：16、訪問訓練：10、盲導犬訓練施設：4、就労の機会提供施設：7、盲養護・特別養護老人ホーム(老人ホーム)：14)から 2,233 人分の回答を得た。調査時年齢は、老人ホーム以外の施設(一般施設)では 52.9 ± 15.8 歳、老人ホームでは 80.9 ± 8.5 歳であった。全施設で最も多かった眼疾患は網膜色素変性症(21.3%)で、次いで緑内障(10.4%)、不明(8.1%)、視神経萎縮(7.4%)、未熟児網膜症(5.8%)、糖尿病網膜症(5.6%)、小眼球(5.4%)の順であった。網膜色素変性症は、第1回(1986年)から第7回目の本調査まで連続して最多となっている。全施設での不明・未記入を除く視力では 0 (34.6%)が最多で、0.01 以下(18.6%)、0.05 以下(17.5%)の順となっていた。重複障害のある利用者は、一般施設では 49.0%、老人ホームでは 18.0%であった。重複障害のある利用者のうち一般施設では知的障害(82.3%)が、老人ホームでは聴覚障害(44.9%)が最多となっていた。

6. まとめ

一般施設利用者の平均年齢は 50 歳代、老人ホームでは 80 歳代である。全施設利用者の眼疾患では、網膜色素変性症が最多であり、調査開始から一貫して最多の眼疾患となっている。全施設における視力は 0 が最多である。重複障害の利用者で最も多いのは、一般施設では知的障害、老人ホームでは聴覚障害である。